慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	重商主義解体期における科学的賃銀理論の諸萌芽 : 賃銀学説史序説
Sub Title	Introduction into a history of wage theories : germs of scientific theory of wages at the closing period of mercantilism
Author	黒川, 俊雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.2 (1950. 8) ,p.96(26)- 109(39)
JaLC DOI	10.14991/001.19500801-0026
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500801-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

重商主義解體期における科學的賃銀理論の諸萠芽

——賃銀學說史序說——

黑川俊雄

一

ジョン・ロックは、人の知る如く、デカルトの本有觀念の學說と鬪爭してこれを克服し、認識を經驗に還元した形而上學的感覺論の創始者であるとともに、十八世紀フランス唯物論の先行者でもある。彼はまた十七世紀のイギリスにおけるホイッグ黨の大哲學者であつたが、そればかりではなく當時ホイッグ黨の手中にあつたイングランド銀行の大株主であり、政府の重要な官職についていて、その政治的見地において自由主義者であつた。そして經濟學者としてのジョン・ロックは、富に關する學說においてはマーカンチリストに屬し、その他の諸問題についてはそれの批判者であつた。ロックが經濟學の上に如何に大きな影響を與えたかについては、マルクスが次のように適切に語つている。即ち、「初期のイギリスの經濟學者達は彼等の哲學者としてのベーコンおよびホッブスに贊同したが、後にはロックが、イギリス、フランスおよびイタリーの經濟學の『哲學者』そのものとなつた。」（資本論第一卷長谷部譯第三分冊一五六—七頁）と。

このロックはあたかもイギリスにおいて「金錢的利益」の代表者に對する地主の反對運動が擡頭して來た時期にペンを執つていた。（M.Schrey, Hritische Dogmengeschichte Ehermen Lohngesetzes, 1913, S. 4）この反對運動は、云うまでもなくイギリス經濟社會のブルジョア的發展過程の矛盾を表現するものにほかならないが、ロックは實に、「あらゆる形態の新興ブルジョアジーを、即ち勞働者と被救恤民とに對する產業家を、古風な高利貸に對する商業家を、國債所有者に對する金融貴族を代表し、且自著の一つにおいてブルジョア的悟性を人間の標準的悟性として論證しさえしたところの」人物として、（「經濟學批判」宮川氏譯九三頁）かゝる地主の反對運動に敢然と批判の刄をさし向けたのである。そうしてなかんずくその切先は、當時全力を擧げて利子を非難していた封建的大土地所有者に向けられていた。これロックをしてブルジョア的な限界内において多少とも科學的な理論を展開せしめた所以にほかならない。

二

さてロックは、土地所有者に對し、彼等の受け取る地代が、高利貸の受け取る利子と全く選ぶところがないことを證明せんとする論爭的興味を懷いていた。（ローゼンベルク「經濟學史」研進社版第一卷第一分冊一〇四頁）彼に從えば、地代も利子も、財產（生產手段）の不平等な分配によるのであつて、地代は「土地の不平等な分配」によつて、利子は「貨幣の不平等な分配」によつて、共に「一人の人の勞働の報酬であつたところの利得を他の一人の人のポケットに移す」ものである。（「剩餘價値學說史」第一卷邦譯マル・エン全集第八卷四一頁）ロックはこのように地代と利子とを同一の根柢に、即ち剩餘勞働に還元することによつて、地主の利子に對する非難の聲を封じたのであるが、これによ

つて彼は、土地所有の「内部に隠れたる性質」を暴露すると同時に。資本の「内部に隠れたる性質」をも明るみに出してしまつたのである。我々はここにペティーよりの一歩前進を認めざるを得ない。ロックが、たとえ「ペティーの著書と直接の關聯をもつており、且それらの上に基礎を有つている」としても、（同上三六頁）彼は地主との抗争において却つてその理論的鋭利さを増したのである。もつともロックには「資本」という概念はない。彼はなおマーカンティリストらしく利子率を貨幣量に依存させている。「資本」(Stock)の一定せる概念、または「資本になつた貨幣」という考え方は同時代人ノースにおいて初めて現われる。（同上三七頁）しかもロックが明るみに出したのは、ただ利子附資本の「内部に隠れたる性質」だけであつた。從つて彼は剰餘勞働を特定の生産様式に對應する形態（剰餘價値）においてではなく、それが「文明」の一定發展段階において發現するという意味において考えていたにすぎない。それ故資本制生産様式が立脚しているところの賃勞働の本質について特に論じてはいない。けれども、當時絶對主義の物質的基礎であつた封建的土地所有に對して著しく鬪爭的であつた第三階級の背後に、なお第四階級が潜んでいたという歴史的事情を反映して、ロックがブルジョアジーの立場に立つことによつてプロレタリアの狀態を率直に物語つており、且科學的賃銀理論の萠芽を示していることは、注目されなければならない。そうしてそれは特に租税の問題をめぐつて爲されているのである。

その頃地主とブルジョアジーとの抗爭は租税政策において示され、ブルジョアジーの代表者は、商業、工業および農業經營の利害共通を指摘して、地租に重きをおいた租税體系を辯護しようと試みていた。ロックは實にこのような運動の先頭に立つていたのである。(M. Schrey, a. a. O. S. 5) 彼はそこで、地主の地租反對運動が無效に終るべきことを説得せんがために、租税が如何に工夫され又直接何人の手から徴收されるとしても、その大資源が土地に存する國家においては、結局大部分が土地所有者に歸してゆかねばならないことを強調した。そして彼は「地租がその額だけ明白に地主のふところから直接支拂われるために、何よりも先ず地主にとつては苦痛のように思われるがもし地主がこの苦痛を免れようとして租税を商品の上に課せしめるならば、たとえ租税を直接支拂わないようになるとしても、却つて年末にはふところがさびしくなつていることに氣づくであろうということを證明せんとくわだてた。そこで國費を三百萬と假定して、次の如く論ずる。即ち、

「この三百萬を商品に課して、それだけの金額を國庫に納めるには、國民のポケットの中から三百萬よりも澤山に徴收されねばならない。何故ならこの種の租税は、取引をいち〳〵細かく監視するため、莫大な徴收費なしには役人がこれを取り立てることができないし、特に新米の役人ではできないからである。しかしたとえ地租と同様に徴收費がかゝらず、支拂われるのは三百萬だけであるとしても、これを商品から徴收するとすれば、商品の價格が消費者に對し四分の一だけ引き上げられねばならないことは明かである。從つてあらゆる品物は、それを使用するものにとつて四分の一だけ高くなければならないことになる。さあこの四分の一を結局誰が支拂わねばならないか、それはどこへ歸してゆくことになるかを觀るとしよう。商人や仲介業者がこれを負擔しないであろうし、また負擔するはずのないことは明瞭である。何故なら、もし彼が商品を以前よりも四分の一だけ高く仕入れるならば、それだけ高い價格でその商品を賣るだろうからである。貧乏な勞働者や手工業者も負擔するはずはない。何となれば、彼は既に辛じて手から口への生活をしており、その食物や衣服および家財道具などがすべて以前よりも四分の一だけ高くかかるならば、彼を生活させるためには彼の賃銀が品物の價格と共に騰貴しなければならないからである。さもなければ、彼は自分の勞働で自分と家族とを維持してゆくことができず、教區の救濟を受けることになる。そしてそうなれば土地に對す

る負擔はヨリ苛重となるのである。もし勞働者の賃銀が物價の騰貴率に應じて引き上げられるとすれば、農業經營者は、他のあらゆる品物に對すると同樣に、賃銀としても四分の一だけ多額に支拂うわけであるが、他方（租稅のため物品に對する人民の買氣が減じているから）市場において同一もしくは安い値段で穀物や羊毛を販賣するので、彼の納めるべき地代を減額してもらうか、さもなければ地主に對する負債のため破算したり逃亡したりするかしなければならない。そしてこれがため土地の年價値は引き下げられるのである。さてそうなれば年末に租稅を支拂う者は地主以外の誰であろうか？……」（John Locke, Some Considerations of the Consequences of lowering the Interest and raising the value of money. London, 1692; The Works of John Locke, London, 1823, vol. v, pp. 57–9）と。

ロックは右において勞働者の狀態を「手から口への生活をする」ものとして特徵づけ、明かに素朴な生存費說的な思想を展開している。この點は他の箇所にも認められる。即ち彼は言う、

「勞働者の分け前は減多にかつ〳〵の生存費（A bare subsistenee）以上に出でないから、その彼等の階級は自分の思想をヨリ以上に向上させたり、自分の分け前のために富者と鬪爭したりする餘裕も機會も與えられない。たゞ廣くゆきわたつた烈しい窮迫が、彼等を團結させて普く暴動を起させ、後先をかえりみず、大膽に武力を以て彼等の欲望への血路を開かしめるようなことがあるだけである。」（ibid p. 71）と。

要するにロックは賃銀についてさきのペティーと同樣の立場に立つている。しかもそればかりではなく、彼はペティーとは異り、法律的規制を離れて「自然的賃銀」を「必要な生活資料」に還元している。このことは歷史的に何を反映しているか。それは、從來賃銀の「外部的規制者」たりし國家機關に、「內部的規制者」として人口過剩が對立させられるようになつたマーカンティリズム解體期の成長轉化の過程を反映しているものと云えよう。そしてこの成長轉化は、人口の絕對的增大にあるのではなく、賃銀を貨殖に適合する限界內に閉ぢ込めておくために勞働者人口を過剩ならしめるところの資本制蓄積の本質が展開して來たことに存するのである。

さて筆者はここで、ロックの賃銀理論に對するマリー・シュライの批判について一言しておこう。彼は、ロックの所論を略述してから、どれに次のような評言を與えている。

「勞働者の狀態が獨立して取り扱われているのではなく、特に興味をそそるような實際的諸問題と結びついて取り扱われていることからして、この現象の基礎が何であるかは我々に擧止されていない。我々は『個々の事實についての有益な觀察と分析』（Roscher, Zur Geschichchte der englischen Volkswirtschaftslehre, Leipzig. 1857）を發見するが、勞働者の運命はまだ問題としては考察されておらず、單なる事實として受け取られている。勞働者の供給と需要とが何によつて決定され、また需要供給の振動が如何にして賃銀の上に影響するかは、まだ吟味されていない。」（M. Schrey, a. a. O. S.4–5）と。

しかしこうした批判に對しては、筆者は、ロックがむしろ需要供給の關係から獨立して規定される自然的賃銀」を「必要な生活資料」に還元したところに大きな科學的功績のあつたことを强調しなければならない。從つて、勞働者の供給と需要とが何によつて決定され、また需要供給の振動が如何にして賃銀の上に影響するかをまだ吟味していないとしても、ロックの右の功績は少しも否定されはしない。しかも、更に進んで「現象の基礎」即ち本質に透入して勞働者の供給を需要に超過せしめる社會的機構を賃銀の現實的運動との關聯において把握するためには、資本制生產のヨリ以上の發展を必要としたのである。

三

我々は次に、ロックの影響を蒙り、イギリスで「科學的社會主義」の手ほどきをした（Palgrave's Dictionary of Political Economy, Vol Ⅲ, 1910, P. 611.）などとさえ云われるジャコブ・ヴァンダーリントの所論を見ることとしよう。

ヴァンダーリントは、マルクスによつて、ナサニエル・フォスター、リチャード・プライス、ポッスルスウェート、ジョサイア・タッカーなどと共に、「勞働者擁護の側に立つた論者」（「資本論」第一卷長谷部譯第二分冊二七〇頁）と呼ばれている人であるが、彼の低賃銀反對論については筆者が既に言及せるところであつた。（拙稿「英國近代社會の生成と賃金理論」（本誌第四十二卷第一號）

抑々十八世紀にはいつてからその中葉に至るまでイギリスにおいて賃銀が昂騰したことは、人の知るところである。けだし、資本の構成に變化がないか、もしくは少ない限り、勞働に對する需要および勞働者の生活維持基金は、明かに資本の增大に比例して增加するのであつて、資本が急速に增大すればするほど、ます〳〵急速に增加するので、勞働に對する需要がその供給を超過し、その結果賃銀が昂騰するような時期が到來することがありうるからである。そしてどのような時期が到來するときには、いつも賃銀昂騰に對する怨嗟の聲が聞かれるのであるが、イギリスにおいてもとの十八世紀の前半期を通じて、曾ての十五世紀におけると同樣に、苦情が吐露されたのである。そして「商工業論」の匿名著者を始め、バーナード・ドゥ・マンダヴィルなどによつて、貧民禮讃の辭が呈されたのである。例えばマンダヴィルはかの「蜜蜂物語」の中で率直に述べて云う。

「所有權が充分に保護されている所では、貧民ないに生活するよりも貨幣ないに生活する方が容易であろう。……勞働者は飢餓から保護さるべきであると同樣に、貯蓄に値するものは何も與えらるべきではない。……勞働者を勤勉ならしめる唯一のものは適度な勞賃である。過小な勞賃は、氣質の如何によつては、彼をして意氣沮喪させたり、自暴自棄に陷らせたりするが、過大な勞賃はまた横着で怠慢ならしめる。……社會を幸福ならしめ、人民をみじめな狀態においてすら滿足させるためには、大多數者が何時までも無智であると共に貧乏であることを要する。（「資本論」第一卷前掲譯第四分冊一〇六頁）と。

右の引用文には勞働者に貯蓄する餘裕を與えず、同時に彼等を賃勞働の狀態から解放しないような、「適度賃銀」論が表明されている。實にこのような「適度賃銀」論に對抗して「高賃銀論」を唱えた人々のうちで秀れた者の一人が、ジャゴブ・ヴァンダーリントその人にほかならなかつた。けれども彼自身オランダ商人であつたばかりでなく、當時「マニュファクチュアの內部はおける賃銀闘爭は、マニュファクチュアを前提とするものであつて、決してマニュファクチュアの實存を覆さんとするものではなかつた」（同上第三分冊二三八頁）限り、勞働者擁護の側に立つ所謂「高賃銀」論と雖も全く自生的な產業資本の發達の波に乘つているものであつた。しかもその當時賃銀が昂騰したとは云え、「賃銀勞働者を維持し增殖せしめるところの多かれ少かれ有利な狀態は、資本制生產の根本的性質の上には何らの影響をも及ぼすものではなく」、「勞働力の再生產ということは、實際のところ、資本それ自身の再生產の一契機となつており」、（同上第四分冊一〇三四頁）曾ては國家の强制を伴つたところの出發點にすぎなかつたものが、今や資本制生產の特殊な結果として絕えず、更新され永久化されることになつて來た。かゝる事情の下に、ヴァンダーリントは、勞働者擁護の側に立つことによつて、實は資本の立場から、勞働者の「必要な生活資料」を一の與えられた大きさであると見做して、勞働の「自然價格」――彼の言葉に從えば「眞正の價値」（proper Value）――を必

要な生活資料」に還元している。即ち、彼は、筆者が既に引用せる如く、「勞働者の賃銀が、勞働者としての低い地位と身分に相應して、彼等の多くの者がその境遇として屢〻持つような澤山の家族を支持することができないほど云々」と述べ、そこで勞働の價格はつねに生活必需品の價格によつて構成される。」（Vanderint, Money answers all things, 1734. P.15; A Reprint of Economic Tracts ed. by Jacob H. Hollander, 1914, P.23—4.）という生存費説的な命題を提起している。彼は、マンダヴィルが、「貧民なしに生活するよりも貨幣なしに生活する方が容易であろう。」として「貧民萬能論」を唱えたのに反して、貧民の窮乏生活を不必要なりとして、その著書の題名「貨幣は何事にも應ずる」"Money answers all Things"という言葉が示す通り、「貨幣萬能論」を提唱しているのであるが、しかも尙「身分相應なる慾望」ということを繰返し、勞働貧民の生活水準を與えられたる大きさとして受けとつていた。所謂「必然的慾望」の範圍は、その充足の仕方と同じように、それ自身一の歴史的産物ではあるが、第二の自然となるところのものであり、一定の國にとつては、一定の時代には、「必要な生活資料」の平均的範圍が與えられている。（「資本論」第一卷前掲譯第二分册五四頁、同第三卷下高畠譯三九五頁）ヴァンダーリントは、既にとのことを、素朴にではあるが、正當に意識していたのである。

だがその後「必要な生活資料」という概念についてより深奥な理解を示したのは、かのマーカンチリストの殿將にして、マルクスがマーカンティリズムの「合理的表現者」（「剩餘價値學説史」第一卷ムル・エレ全集第八卷五六頁）と稱したところのジュームス・ステュアートである。彼は生活資料の最低限を「生理的に必要な最低限」と「政治的に必要な最低限」とに分かつている。この「政治的に必要な最低限」とは、今日の言葉を以てすれば、文化的最低限に相當するものであり、一國の文化段階に依存するところの「必然的欲望」の範圍にかゝわるものであろう。從つてステュアートがこのように生活資料の最低限を二つに區分して考えたことは、特に注目されねばならない。けだし從來の粗笨なる生存費説の枠を一歩踏み出しているからである。しかし結局においてマーカンティリストにほかならなかつた。ステュアートは、賃銀の法則を表式化するために、換言すれば現實においてそれが如何に決定されるかを示さんがためにこの區分を必要としたのではなく、むしろ「爲政者」に賃銀を統制すべき標準を與えんがために必要としたのである。即ち彼は云う、「第一に、生理的必要物のために勤勞する人々の間には如何なる競爭も奬勵さるべきではない。第二に、外國貿易のお蔭で繁榮するところの國家においては、競爭者達が互に（その所得を）生理的必要物に引き下げるまでに輸出の各部門において競爭が奬勵されねばならない。」（ローゼンベルク前掲譯書一五五頁）と注目すべき點は、ステュアートがここで賃銀を生理的最低限にまで壓し下げ得るとことを、「狹隘な實踐的見地」からではあるが、認めておるということである。

四

以上我々は、アダム・スミス以前の、マーカンティリズム解體期におけるイギリス經濟學者達の著述中に、科學的賃銀理論の諸萠芽を、換言すれば、その上に科學的賃銀理論が築かるべき「最初の石」を探求して來た。その結果マーカンティリズムの解體に歸着すべき現實の矛盾展開を通じて、各論者について一貫して見出された所は、「必要な生活資料」という概念に對する理解の發展であつた。ペティーにおける、「恰度生きて行けるだけの生活資料」という概念から、ステュアートにおける、生活資料の「生理的に必要な最低限」と「政治的に必要な最低限」とへの區分に至るまで、それはかなりの發展であつた。そして賃銀をとの「必要な生活資料」に還元する理論が、後にイギリス經

濟學において、スミスを經てリカアドに至り、生存費説として定式化されたのであり、しかもこの理論が初期のマルクス、エンゲルスによつて批判的に受け繼がれ、「勞働力の自然價格即ち正常價格は、勞賃の最低限即ち勞働者の生存と繁殖とに絶對に必要な生活資料の等價（註一）（＝勞働力の價値―筆者附記）と一致する。」（Engels, Marx's das Elend der Philosophie, S.24.Note『哲學の貧困』マル・エン・全集第三卷五〇四頁）という命題に發展せしめられた。この命題をラサールがマルクス、エンゲルスから取つて、所謂「賃銀鐵則」として方式化したのであるが、マルクス、エンゲルスは右の命題にのみいつまでも停滯してはいなかつた。さればこそエンゲルスは、「哲學の貧困」のドイツ版に註記して、次のように語つている。「……との命題は、私により改めて『國民經濟學批判大綱』（獨佛年誌パリー一八四四年）および『イギリス勞働者階級の狀態』の中で主張されたものである。讀者のことに見られる通り、マルクスもその當時はとの命題を支持していた。そしてラサールは我々二人からとの命題をうけついだのである。しかしたとえ實際において勞賃はその最低限（＝勞働力の價値―筆者附記）（註二）に近づかんとする不斷の傾向を有するとしても、しかも尙上記の命題は誤つている。勞働力が一般に又平均してその價値以下に支拂われるという事實は、その價値を毫も變化せしめることにはならない。マルクスは『資本論』において上記の命題を正しく取り扱つている、と同時に、（勞働力の購買と販賣の節）資本制生産をして勞働力の價格をいよ〳〵益々その價値以下に壓し下げることを得しめる諸事情を展開した。（第二十三章資本制蓄積の一般的法則）」（Ebenda. 前掲譯書同頁）と。

エンゲルスがとこで、「上記の命題は誤つている」と述べているにもかゝわらず、この同じ命題を「正しく取り扱つている」と云つているのは、一見矛盾しているかのように見える。だが決してそうではない。

先づ、マルクスが「資本論」において、「上記の命題を正しく取扱つている」と云われる所以はほかでもない。との命題に從つて、勞働力の價値で表現されているところの「必要な生活資料」の價値（「資本論」第一卷前掲譯第二分冊五八頁）に勞働力の價格が一致するという假定から出發することが、商品流通の一般的法則（等價物同志の交換）に立脚して如何に剩餘價値を科學的に基礎づけ、資本蓄積の可能性を論證するか、という課題の性質から來ているからなのである。即ちマルクスは右の假定から出發して、剩餘價値が偶然的な利得ではなく、勞働力の價値が完全に支拂われるときでさえも、勞働者の勞働によつて形成されるところの、價値の過剩分であることを科學的に證明しているのである。かくてマルクスは更に進んで、剩餘價値が如何に生産されるかを論述し、この生産の本質的諸關係を表現すると同時にとれを隱蔽するところの現象形態として、つまり勞働力の價値の轉化形態として賃銀を分析して後に、生産を不斷の連續と更新の流れにおいて觀察することによつて、剩餘價値生産が如何に間斷なくそれ自身の諸前提および諸條件を再生産するかを研究しており、とこにおいて、資本蓄積の可能性が現實化され、資本蓄積と賃銀率との間の關係が資本に轉化された剩餘勞働と追加資本の運轉に必要な追加勞働との間の關係以外の何ものでもないことを明かにし、以て蓄積の必然的産物たる相對的過剩人口＝産業豫備軍の壓迫によつて賃銀が勞働力の價値以下に引き下げられる諸事情を展開している。それ故資本主義的現實においては賃銀は實質上勞働力の價値に到達しないことになる。最後の環は最初の環の「否定」なのである。實にとの限りにおいて、出發點の假定であつた命題をそのまゝ現實の中に持ち込むとすれば、その命題は誤つているとことになる。現實に接近するためには中間の環が必要なのである。

しかも何れの環も相互に云わば「連結」されており、それ〴〵の環は剩餘價値論によつて「鍛接」されている。從つて現實の賃銀も決して勞働力の價値を離れては考察し得ない。しかも賃銀の現實的運動においては、勞働力の價値はそのまゝの形では廢止されるが、同時にヨリ高い段階に高められ且維持される。即ち資本制生産の矛盾、敵對關係

の下では、勞働力の價値は賃銀の最高限界として保持され、この勞働力の價値の賃銀に對する決定的影響は、反作用的なモメントのうちに見られる。換言すれば、社會的機構の一車輪として價値增殖運動の意識的擔當者たる資本家が「必要な生活資料」を勞働者に保障することを意識的には決して任務とせず、賃銀をできるかぎり、「必然の程度」に押し下げようとする壓迫に抗して、これを阻止するところの反作用として、即ち、奴隷や農奴とは異り自ら生産手段の一部たることを止め、一切の生産手段から分離された勞働力を自分の所有に屬する商品として販賣するところの「自由な勞働者」の反抗として、現實の賃銀に對する勞働力の價値の決定的影響は明瞭なのである。そしてこの限りにおいて、勞働力が一般に又平均してその價値以下に支拂われるという事實は、その價値を毫も變化せしめることにはならないのであつて、また實際において賃銀は勞働力の價値に引きつけられんとする傾向を有しているのである。

かくて我々は、エンゲルスが云つているように、「勞働力の價値を必要な生活資料の價格に限定する法則、及び勞働力の平均價格を通例その生活資料の最低限（勞働力の價値以下筆者附記）に壓し下げる法則、この兩法則が、その車輪の間に勞働者を壓し潰すところの自動機械のような抵抗し難い力を以て彼等の上に働く」（「イギリス勞働者階級の狀態」一八九二年ドイツ版序文・マルエン全集第三卷二二―三頁）というととを理解することができる。そしてこの兩法則を統一的に把握するところに科學的賃銀理論の「完成」があるのであり、この意味において、ペティー及びその後繼學徒達が「必要な生活資料」の概念を發展せしめ、賃銀をこの「必要な生活資料」に還元して來たととは、一方の法則についてではあるが、やがてその上に科學的賃銀理論が築かるべき「最初の石」を据えたと云うととができる。しかも、二つの法則を統一的に把握するための、最初の環から最後の環に至る鎖全體を、鍛接しているとも云うべき剰餘價値論を彼等は多かれ少かれ事實上取り扱つていたし、殊にペティー、ロックなどはこれについて相當に「深い見解」を示しており、ペティーの如きは、剰餘價値論と賃銀理論とを素朴な仕方で結びつけてさえいた。

けれども今一つの法則たる、勞働力の平均價格を通例その生活資料の最低限に壓し下げる法則については、スミス以前のイギリスにおいては、殆ど科學的な貢献をなした者がなく、既述の如くステュアートが「狹隘な實踐的見地」からとれを取り扱つた以外には、わずかに、チャイルドほか數少いマーカンティリスト達が、賃銀の運動を人口の運動との依存關係において著しく皮相的に考察しただけであつて、その考え方も後世マルサス等の俗流辯護論的人口理論の支柱へと轉化されたのである。

ところがこれとはやゝ異り、この當時としては實に正しい觀點からすでに賃銀理論と人口理論とを結びつけて考察していた人々があつた。それは、イギリス海峽を隔てた對岸のフランスを發祥の地とするフィジオクラートあるいはその先驅者の一人と見做されるリシャール・カンティヨンである。彼等は、そのほかにもやはり賃銀を「必要な生活資料に還元しており、剰餘價値の源泉の探求を決定的に流通過程から生産過程に移すなど、多くの科學的功績を見せている。從つて彼等の所論についての研究は、賃銀理論が「現實的な科學」として確立して行く過程をあとづけるためには跳び越すととのできない重要な一章をなさねばならない。

（追記）本稿は三田學會雜誌第四十二卷第二號所載の拙稿につづくものである。